

図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校
東京都渋谷区代々木3-22-1 TEL.03-3299-2395 FAX.03-3299-2604

No.178

文化学園図書館

2024年4月5日発行

私を創った本 教員編 第2回

今号も前号に引き続き「私を創った本 教員編」です。第2回となる今号では文化学園大学造形学部デザイン・造形学科の先生にご協力いただきました。

アートを教える先生方がどんな本を選んだのか、お楽しみください。

改めて「私を創った本」とは…？

ファッション界をはじめ、各界で活躍されている方から、考え方や人生に大きな影響を与えた本を教えていただき、図書館内で展示する企画です。その本を読むことで、学生の皆さん自身の未来を創るためのインスピレーションや気づきになってもらえればという思いで行っています。

第1回は、文化服装学院の卒業生で、ISSEY MIYAKEの宮前義之さん。第2回は、文化服装学院卒業生で、アーティストのとんだ林蘭さん。

第3回は、文化服装学院卒業生で、TSIホールディングス代表取締役社長の下地毅さんに選んでいただきました。下地さんからはご自身でお持ちの書籍、ご自身がデザインしたフライトジャケットも展示のためにご提供いただき、学生の皆さんにも大変好評でした。



展示風景(第3回)

私にとってビジュアルブックやイラスト集は格別の意味を持つ。美術大学に通ったことやデザイナーという仕事を選んだのも、これらの書籍が理由のひとつであった。ここでは高校生から大学生の頃（70年～80年）に出会ったビジュアル系の書籍から3冊を選んでみた。

85年頃だったか、当時は神保町に行って国内外のビジュアルブックをあさっていた。ある日、三省堂の5階にあった洋書売り場で物色していると、とんでもなく奇怪な大判の本が平積みされていた。モノクロのエアブラシで大きなバフォメット(悪魔)が描かれた表紙は店内で異彩を放ち、本を開くとさらに大きな衝撃を受けたことを記憶している。ハンス・リューディー・ギーガーの『NECRONOMICON 1』であった。ゴシックやバロック、バイオメカニカルとエロスが混在するイメージは私の身体と脳に染み付き、その後のアートやデザインを考える上での聖痕となった。

神保町に行くと必ず訪れる書店があった。マンガ好きの間では有名であった高岡書店(後にコミック高岡)である。普通の書店では手に入れにくい新人作家の単行本なども多く扱っていた。後に『攻殻機動隊』で世界中でブレイクした士郎正宗のメジャーデビュー作『アップルシード』もその棚にあった。

70年代にマンガで育った世代が青年となり、青年漫画誌が各社から創刊されるとともに、独立系出版社によるマンガ単行本も多く出版されるようになった。新しい読者層が求めたのは、彼らが納得できるリアリティやイメージをいかに描けるか、であった。士郎の場合はト書きにその特徴があった。各コマで描かれるキャラクターやマシン類への考察や説明がマージンにここぞとばかりに書き込まれていた。

戦闘美少女系キャラクターと独特でユニークなメカ群、建築的な都市描写、そして饒舌なト書きの組み合わせは確かに新しいリアリティを体現していた。

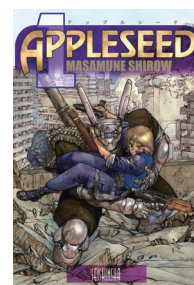
最後に紹介するのはメビウスことジャン・アンリ・ガストン・ジローの『ARZACH』である。駿河台下の交差点の近くにある洋書書店「タトル商会」でよく見ていたのが、SFコミック『HEAVY METAL』だ。メビウスも発刊に関わったBD(バンド・デシネ)マガジン『メタル・ユルラン』のアメリカ版であり、『ARZACH』はそこに掲載後、単行本として出版された。メビウスが日本のアニメ・マンガに与えた影響は有名だが、私も同様の影響を受けた。ロットリングによる無機的な線描、カラーインクによるファンタジックな色彩、少ないセリフ、確かなデッサンに支えられ

た瞬間のコマの切り取りなど、今見ても驚きを引き起こす。

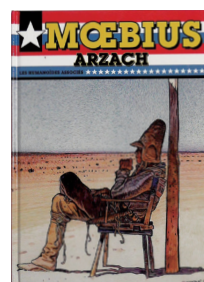
最近はインターネットで本を購入することが多くなり、通っていた書店も多々が閉店してしまった。思いがけない驚異との出会い、洋書や古書の匂い、ユニークな店主や店員、そのような場所は今でも至福の思い出として私の中で生きている。



H・R・ギーガー『ネクロノミコン 1』トレヴィル(1986)〈723.345/G/1〉



士郎正宗著『アップルシード』青心社(1985~1989)〈文庫/S/1~4〉



Moebius『ARZACH』Nouvelle éd. Les Humanoïdes Associés(2012)〈726.1/M〉

牧野 昇

文化学園大学造形学部
デザイン・造形学科 准教授
東京造形大学造形学部デザイン学科
卒業。出版社勤務を経て、フリーの
DTPデザイナー。2005年より現職。

【研究内容】

デジタル3D映像制作技法(Maya、Nuke、CLO、Houdiniなど)やAIを利用した新しいファッション教育の研究・開発。

【研究発表】

「3DCGを用いたファッションデザインのためのツール開発・作品制作③」(2022)

「3DCGを用いたファッションデザインのためのツール開発・作品制作②」(2021)

「オンデマンド映像教材を取り入れたデザインソフトスキルの習得」(2021)

「長野県須坂市における古民家再生プロジェクトワークショップ」(2015-2020)

「3DCGを用いたファッションデザインのためのツール開発・作品制作」(2019)

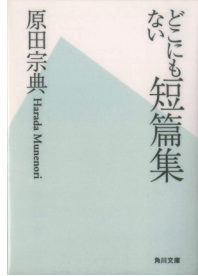
「VR・AR技術を使用したファッションデザインのためのツール開発・作品制作」(2018)



学生の頃は、本があまり好きではなかった。そんな僕が、自ら手にした3冊の書籍。

原田宗典『どこにもない短篇集』

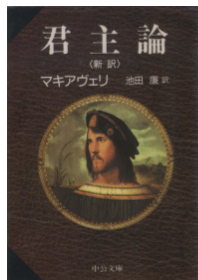
僕がまだ、芸術という言葉に出会う前。大学と部屋を往復するだけの生活の中で、心の隅にある曖昧な感覚。夕暮れ時の陰の中や部屋に戻った時に感じる何か。幼かった頃は世界が不思議な存在で溢れていた。流れる雲も怪獣に見えて、それを言葉で話すことができ、聞いてくれる人もいた。時間を重ねた大人という現実の世界で、心が描いたものや、感じたことを人に話すことができなくなってしまった僕に、感じた世界を人に伝えても良いと背中を押してくれた一冊。



『どこにもない短編集』
著:原田宗典、デザイン:原研哉
KADOKAWA/角川文庫
(2003)〈文庫/H〉

マキアヴェリ『君主論』

東京藝術大学大学院進学後、工芸の修復では技術を追求し、自分自身を消し、時間を重ねてきた人の想いと重なり、過去の表現を妨げないことを目指し過ぎてきた。しかし、アーティストとして作品を作ることになった僕は、そのまま技術のみを追求してしまい、伝えるべき想いを忘れてしまった。物としての存在しかない作品を生み出し、後悔と悔しさの中で出会った本。



マキアヴェリ著 池田廉訳
『君主論・新訳』中央公論社
(1995)〈311.6/M〉

中世ヨーロッパにおける為政者への訓示が書かれており、為政者・市民・治世がどのような関係であるかという難しそうな内容だが、自分自身に置き換えると、夢だけでは何も成し遂げられず、技術だけでは想いは形にならず、想いだけでは夢まで辿り着けないということを教えてくれる。

自分という国の中には、進むべき方向性を示す自分、それを支える自分、誘惑し妨げる自分、状況に流される自分など、さまざまな自分がある。そんな自分をまとめ、現実の世界を歩かせてくれる一冊。

アクセル・ハッケ『ちいさなちいさな王様』

この本は、時間を重ね、年を重ねるということを考えさせてくれる一冊。僕は自分の世界を表現するにあたり、たまに怖く、寂しくなる。ちいさな王様は、年を重ねるにつれ体が小さくなり、最後には見えなくなるほど小さくなってしまふ。人は、成長し身体は大きくなっていく。しかし、成長の過程で徐々に失ってしまうモノ



アクセル・ハッケ作 ミチャエルゾーヴァ絵
那須田淳、木本栄共訳『ちいさなちいさな王様』
講談社(1996)〈943.7/H〉

はないだろうか。生活の中で、ちいさな王様には見えているモノ。与えられる情報は多くなり、想像する時間は少なくなる世の中でも、主人公のように少しの勇気があれば、自分の中にある世界と向き合うことができる。僕は、自分の想像力が消えてしまうのではないかと、怖く、寂しくなった時にこの本を開き、ちいさな王様に会いに行く。

文字は、それぞれが過ごした時間と経験から、その人にしか見られない世界を描いてくれる。僕らの日常は、たくさんの事象から構成される不思議な世界。今いる世界を観察し、異なることを恐れなければ、文字は自分の過ごした時間に力を与え、今は辿り着けない世界でも、たどり着くための道を示してくれるはずだ。

瀬藤 貴史

文化学園大学造形学部
デザイン・造形学科 准教授
東京藝術大学大学院文化財保存学保存修復工芸研究室修了。染色に関する古典技法の研究を行いつつ、現代表現としての友禅染作品を制作。また、実務として染色工場での勤務を経験し、染織技法に関する現状の調査なども行う。現在は、友禅染作品を、ニューヨーク・東京を中心に発表しており、染色の古典技法を海外に発信する。2009年より本学文化ファッション研究機構 共同研究員、2021年4月より本学造形学部 非常勤講師、2022年4月より現職。



【研究内容】

- ・現代における室内装飾、美術表現に伝統的技法材料を用いた染色技法の可能性
- ・希少技法材料の経済活動における継承システムの構築
- ・染織工芸に関する技法・材料、また周囲の文化的背景の継承について
- ・文献等に記されている技法を調査し再現を試みる

【論文・その他】

- 「SQUARE 染 textile 10」(FEI ART MUSEUM YOKO HAMA, 横浜, 2024)
- 「SQUARE 染 textile 9」(ギャラリー一檜 e-F, 東京, 2023)
- 第77回 新匠工芸展(東京都美術館、東京・京都市美術館、京都, 2023)
- 国指定重要無形民俗文化財 相馬野馬追 旗指物制作(福島県)(2022, 2023)
- 「HAKU: The Art of Gold and Silver Leafing」(SEIZAN Gallery, New York, 2022)
- Market Art & Design The Hamptons(SEIZAN Gallery New York ブース, New York, 2022)
- 「伝統的技法材料を用いた作品制作と伝統的技法材料継承への提案」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』第53集(2022)
- 国際工芸アワードとやま2020 羽ばたく工芸の未来展(富山県美術館、富山, 2021)
- 第75回 新匠工芸展(東京都美術館、東京・京都市美術館、京都, 2021)
- TORU FUKUDA & TAKASHI SETO : PURE POETRY (SEIZAN Gallery, New York, 2020)
- アートフェア東京2019(靖山画廊ブース 東京国際フォーラム)
- 埼玉県指定伝統工芸士(友禅・小紋)
- Kids' Leather Programs実行委員会 委員長
- 鴻巣市 文化芸術振興審議会 委員

橋本治『ひらがな日本美術史』全7巻

『ひらがな日本美術史』全7巻は、30年ぐらい前に美術の月刊誌『芸術新潮』に連載スタートしたものが単行本になったものです。著者の橋本治さんは小説、随筆、評論などその博学な知識により多方面で活躍しました。古代から近代までの美術史ですが、全巻読み通すにはかなり根気がいると思います。実は私も全部読んだわけではありません。当時『芸術新潮』に連載されていた一部の記事に感銘を受けて、その後単行本になってから読みたい項目を読んだだけです。

そもそも私は、美術は好きだけど、美術史というものにはあまり興味が持てず、また自分の専門としている彫刻分野で受けた彫刻教育はロダンを代表とする近代の西洋彫刻から始まっていて、それ以前の日本の彫刻というのはどうつながっているのかわからない、というのが本音でした。

この本に鎌倉彫刻を題材にした項目がいくつかあります。鎌倉彫刻といえば運慶・快慶ですが、橋本治はこう言い切ります「運慶の彫刻には濃厚な精神性があり、快慶の仏像には濃厚な宗教性がある」(1巻P.207)。この一文を読むだけで運慶・快慶の時代背景や人物、家系についてもっと知りたくなってしまいます。この本の文章は決して読みやすいとは言えないのですが、このようなピカッと光る鋭く印象的な一文を理解したいがために何とか読み進めてしまいます。また運慶については特に深く書かれ、現代の私たちが運慶の作品に惹かれる理由にも触れています。彫刻とは？仏像とは？(人形につながる話もあるのですが)難しいと思っていた立体造形分野の読み解き方の一助になった本だと思っています。

橋本治『橋本治のかけこみ人生相談』

人生相談の答えというのは大変人間力が問われると思います。世の中の常識を理解しているのはもちろん、人間心理に通じていること、また他人への思いやりをどのように持っているか、そしてその筆者がどのような価値観を持っているかということが透けて見える分野だと思います。

橋本治さんが亡くなったとき、晩年作に近いこの『橋本治のかけこみ人生相談』を手に取りました。数ある「人生相談」の中でもトップレベルの面白さです。質問者の問題を理路整然と明らかにする分析力、人間への洞察力、そして質問内容によっては全力で質問者を励まそうとする温か

なものを感じました。そのような人間力があってこそ、『ひらがな日本美術史』のような独自でその時代の作者に迫るような本が書けたのだと思います、もう一度彼の著書を読み直してみたいという気持ちになったのです。



橋本治著
『ひらがな日本美術史』全7巻
新潮社刊(1995~2007)
<702.1/H/1~7>



橋本治著
『橋本治のかけこみ人生相談』
(幻冬舎文庫)幻冬舎(2018)
<文庫/H>

加茂 幸子

文化学園大学造形学部
デザイン・造形学科 准教授
埼玉大学大学院 教育学研究科
修士課程教科教育専攻美術教育専修
修了。2018年より現職。



【研究内容】

テラコッタや陶などを素材として用い、心象風景を立体作品として表現する創作活動をしている。またその立体作品への彩色やレリーフ表現によって表される効果について研究している。

【論文】

「彫刻における絵画性-レリーフからの検証-」『大学美術教育学会誌』40号(2008)

「現代具象彫刻における彩色効果の研究」『大学美術教育学会誌』39号(2007)

【作品発表】

「加茂幸子展」日本橋高島屋S.C.美術工芸サロン／東京(2016、'19、'23)

「加茂幸子展」ギャラリーアートもりもと／東京(1988、'00、'04、'13、'22)

「吾輩の猫展」佐藤美術館／東京(2017)

「アートフェア東京」東京国際フォーラム／東京(2007、'08)

「N.E. blood21 vol.25—加茂幸子展—」リアス・アーク美術館／宮城(2006)

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

TEL:03-3299-2395 [URL] <https://lib.bunka.ac.jp>

X(旧twitter)とfacebookにて図書館の情報を発信しています

[X(旧twitter)] <https://twitter.com/bunkalib> [facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>



文化学園は、2023年に創立100周年を迎えました。記念ロゴマークは、本学園の学生がデザインしました。